



INTERVIEW  
Global Pachinko株式会社  
長北 真 代表

想定していたので、カジノディーラーとしてキャリアを積んでみました。ただ、カジノで本当に稼げるのはスーパバイザー以上。このポジションは今後、日本のIRで絶対不足するだろうと思います」

そこで19年12月に再びマレーシアに渡ってカジノのスーパバイザーを目指した。ところがコロナ禍が広がりカジノが閉鎖されたため、再びマレーシアでカスタマーセンターの仕事に就いた。

外国人向けパチンコツアー開始

その頃すでに、日本で外国人にパチンコを楽しんでもらう構想を持っていました。日本にIRができれば、パチンコ業界もIRのあり方に近づいて、外国人向けにサービスを展開していく流れになっていくだろう。そんな思いを抱いていた長北さんは、22年6月に帰国する直前から、日本で外国人向けのサービスを展開する事業の準備を開始。帰国後にGlobal Pachinkoを設立した。当初はホール向けのサービスを考えていたという。だが、まだ外国人客の取り込みに大きなリソースを割くホールはなかった。

そこで、まずは外国人から声を聞くことが大事だと考えてインバウンド向けのパチンコツアーを企画。予約して来てくれた外国人に有料でサービスを

提供している。

最近では中国や韓国からの訪日客が九州のホールなどで遊技をしているが、Global Pachinkoでは中国人と韓国人をビジネス上のターゲットにはしていない。中国人も韓国人も日本でパチンコ・パチスロをするということについて、自国の法的リスクを負う行為だと認識しているからだ。

長北さんにはパチンコツアーを通じて外国人にパチンコ・パチスロの楽しさを知ってほしいという思いがある。「ツアー参加者は、実際に遊技するとすごく喜んでくれます。パチンコもパチスロも当たれば楽しい。彼らにとってみれば、3000円使って4000円分の賞品がもらえるだけで『なんてこった!』となるわけです」

『みんなパチフェス』の成果

昨年11月にベルサール秋葉原で開催された日工組が主催する『みんなのパチンコフェス』で、長北さんはインバウンドコーナー運営の一役を担った。当日は外国人277人が遊技を体験して、終日列が途切れないほどの盛況ぶりを見せた。

「日工組様の事前の会議では、初めてのことでどれだけ外国人が来るのか不安視する声もあったのですが、ぼくは300人は来ると予想していまし

# インバウンドで業界再構築を

2022年にGlobal Pachinko株式会社を立ち上げ、外国人向けのパチンコツアーなどを手掛けている長北真さん(40)。遊技参加人口が減少する中で新たなプレイヤーを取り込みたい業界にとってインバウンド市場は見逃せない。だが多くの業界関係者が現時点でインバウンドの取り込みに現実味を覚えていない。訪日外国人が普通にパチンコを楽しむ——。長北さんには固定概念を覆すそんな未来が明確に描かれていた。

聞き手=野崎太祐(本誌)

1984年、沖縄県に生まれた長北さん。小・中学校時代にネットゲームに夢中になったことが、今に至るルーツの始まりだった。当時はまだインターネットの黎明期。主に海外のオンラインゲームに夢中になっていた長北さんは、必要に迫られて独学で英語を学んだ。英語以外の科目はまったくノータッチ。日本では進学できる高校がなく、英語が活かせるアメリカの高校に留学した。

留学先は米国東部コネチカット州の全寮制の高校。当時はまだ電話回線が主流の時代だった。「一生懸命LANを勉強して、学校の職員室からLANケーブルを引っ張ってきて、無理やり自分のパソコンにつなげてゲームをやっていました(笑)」。

高校卒業後は日本に戻り、青山学院大学法学部に入學。学費を稼ぐためにアルバイトをしながら、病気もあって6年かけて卒業。学生時代には実益も兼ねてパチンコ・パチスロに親しんだ。

卒業後はネットワークエンジニアとしてオファーを受け、いくつもの企業で仕事をした。その後日本人向けカスタマーセンターの立ち上げの仕事でマレーシアに渡り、外国人が日本語でサポートできる体制づくりなどを手がけた。さらにオーストラリアやシンガポールのカジノでディーラーとして働いた。「今後日本でカジノができることを

た。試打機が5台だと行列が途切れるわけがない」と

なぜそう思ったのか。

「パチンコは面白い遊びだという前提があつて、その面白いものを共有するだけでいいからです。のるかそるかでのキャンセルではなくて、大当たりまでのプロセスを楽しむのがパチンコ。このリーチはとか、この保留変化はもしかしてという期待感や、実際当たつてからの高揚感を的確に伝えることができる。楽しくないはずがない。訪日客の6〜7割はパチンコの存在について知っています。ただ、実際に試すにはどうしたらいいのかわからない。店舗に入っても何もリソースがないのが今の状態で、それらをすべて提供するイベントであれば、絶対に来てもらえらると思えました」

『みんなのパチンコフェス』におけるインバウンドブースの盛況ぶりや、ようやく業界内にも外国人ユーザーの取り込みと向き合うムードが生まれ始めたこと、長北さんは肌で感じている。

「これまでは暗中模索という感じだったと思います。例えば過去にマルハン様が実施した個社のインバウンド向けイベントでは、9割の参加者がもう1回遊んでみたいという感想を持っていました。これだけ訪日客が来ているにも関わらず、インバウンドがパチン

コホールにお金を落とさない。それはアプローチを間違っているだけだと思います」

『みんなパチフェス』は訪日外国人旅行者が多い秋葉原での開催だった。日工組の集計ではパチンコブースに足を運んだ外国人の半数以上はアメリカとヨーロッパからの訪日客だった。

「秋葉原には中国人がたくさん来ているという認識は、もはや大きな間違いです。現状で秋葉原にいる中国人は全体の1割にも満たない。これはインバウンド全体の風潮ですが、中国や韓国に住んでいる人で、日本に旅行して秋葉原に行くことはもはやイベントにならない。日本で秋葉原に行つてすごく楽しかったという話を共有しても、誰も感動しない。彼らにとっては、日本で西表島に行つたぐらいのことが自慢になるんです」

以下は長北さんとの一問一答

プレイヤーがプレイ

——遊技業界のインバウンドの現状をどう見ているのか  
長北 「何もしていません。『何もしていません』って思っています。さなくはないけど、プレイヤーの環境を整えることが、パチンコが登

続きはデジタルブックで  
ご覧いただけます。

詳細はこちら▶